

論文の和文要旨

論文題目

神学と宗教学の狭間で
—R. オットー『聖なるもの』をめぐって—

氏名

藁科 智恵

本論は、宗教学の「古典」とされるルドルフ・オットー『聖なるもの』を繫留点として、20世紀初頭のドイツにおける宗教・信仰と学問との緊張関係を捉えようとするものである。19世紀から20世紀初頭ドイツにおいては、「生の哲学」の台頭に見られるように、「生」「体験」といった生の意味を渴望するような精神的状況が存在していた。そして、そこに生きる人々の実存を揺るがすような、この精神的状況は、学問の領域にも及んでいた。学問の領域において、「学問」という観念が大きく変化していき、キリスト教信仰の自明性が揺らいでいる状況の中、「宗教」に関わる「学問」もまたこの宗教的、精神的状況に対処する必要があった。この宗教的、精神的状況を体現しているのが、19世紀から20世紀にかけてドイツで活動した神学者であり、宗教学者であったオットーである。彼が1917年に書いた『聖なるもの』は、専門を越えて多くの読者を惹き付けた。この著作を繫留点として、当時の学的議論に内在しつつ、相互に緊張を孕んだ知的議論の布置連関、この知的議論を深く規定している当時の宗教的・精神的状況を解明的に叙述していく。

従来のルドルフ・オットーに関する研究は、哲学的、哲学史的な観点から行われるものが多かった。しかし、宗教学での「宗教」概念、あるいは「宗教学」の成立自体に焦点を当てる研究が始まるのと平行に、1990年代頃からは、オットーの学問以外の領域での活動も視野に入れた研究が現れてくる。このような歴史的な文脈に焦点を当てた研究の延長線上に本論も位置付けられる。その一方で、本論に特徴的なのは、オットーの『聖なるもの』を中心とした学的営為を、近代における信仰の危機と学問という観点から、神学

と宗教学との緊張関係において捉える点である。

本論は、第一部「宗教的・社会的状況における危機」、第二部『宗教』をめぐる学的情況」、第三部「危機への対処としての『聖なるもの』」、という三部構成となっている。

まず、第一部では、オットーの生涯を見ていき、彼がこの時代に感じた信仰と学問における真理との間で感じた葛藤を確認する。そして、彼が生きた時代の宗教的情況を教会内外においてみた上で、同時代人の宗教的・社会的状況の分析を扱う。これらの叙述を通じて、そこにおいて認識された危機的な宗教的・社会的状況を浮き彫りにする。第二部では、第一部で見てきた状況の中で、「宗教」という主題が学的な議論においてどのように扱われていたのかを神学、宗教哲学、宗教心理学に焦点を当ててみていく。第三部においては、第一部で確認した危機的な宗教的情況、そして第二部において確認した「宗教」を学的に扱うことに際する問題を踏まえた上で、オットーのその危機的な状況への一つの応答として『聖なるもの』を捉える。その際に、「宗教的アプリアリ」、「現象と実在」、「絶対他者」という観点から、分析を加えていく。

まず、第1章において、オットーの生涯を振り返る。幼少時から、ゲッティンゲン、マールブルク時代を時系列で追っていくことにより、オットーが自由主義神学を学び始める際にとった決断等から、彼が神学をこの時代に営むことに際して感じた葛藤を描き出していく。

第2章においては、19世紀から20世紀前半に至るまでの、教会内外の宗教的情況を確認した上で、その宗教的情況を同時代人である社会学者ゲオルク・ジンメル、神学者パウエル・ティリッヒの分析を通じて見ていく。19世紀において信仰のあり方が大きく変わる中で、教会もその状況に対処するため、社会福祉活動、礼拝改革等さまざまな試みを行っていく。しかし、教会行事への参加率は低下し続け、信仰における教会の存在は弱体化していった。そして、それまでの教会という枠組みの外部にもさまざまな諸世界観団体が生まれてくることとなる。このような宗教的情況は、同時代人であるジンメル、ティリッヒによっても叙述されていた。ジンメルによって分析された、それまでは宗教的表象によって満たされていた宗教的欲求、宗教性は、ティリッヒの分析において、特に表現主義絵画、つまり、人々の宗教的内実を表す新たな様式において確認されているのだという。

第3章では、牧師から政治家へと転身したフリードリヒ・ナウマンとオットーの関係を、ナウマンの『宗教についての手紙』とオットーの書評を通じて見ていくことにより、オットーにおける宗教、政治、学問の関係を分析した。第2章においてジンメルによって分析された「形式を失った宗教性」は、ナウマンによっても「故郷を失った宗教的感情」として叙述されている。そのような状況で、ナウマンは「政治家」として、この宗教性に「故

郷」、つまり現実への接点を与えることに専心する。しかし、それは簡単な決断ではなかった。キリスト教倫理と経済活動、政治活動との矛盾を目の当たりにしたナウマンは、その矛盾について考え抜き、政治的な活動に自らを徹底的に従事させることとなる。このような政治家ナウマンの姿に、オットーはルター、シュライアマハーに連なるような敬虔な人を見出す。宗教的感情の危機的な状況において、「近代においてありうる敬虔さ」を政治という領域において全うしようとしたナウマンに対し、オットーはそれを学問の領域において全うしようとしたのである。

第4章では、19世紀の自由主義神学、特にシュライアマハー、リッチェル学派、宗教史学派における議論を「学問」と「実践」といった観点から見ていくことにより、その両者の乖離ということが問題化されていたことを示す。その中で、シュライアマハー、リッチェル学派によって、宗教的洞察、宗教的感情が、学問的認識とは別のものとして位置付けられていたことを確認する。そして、オットーが『聖なるもの』において展開した議論がこの延長線上に位置付けられるものであることを示す。

第5章は、宗教哲学に焦点を当てた上で、シュライアマハー、フリースにおいて「宗教」という主題が宗教哲学的にどのように扱われていたかを確認し、オットーが提示するカント・フリースの哲学を見ていく。シュライアマハーの『宗教論』の持った意義を高く評価するオットーであるが、彼によって宗教的感情が学問的認識とは別のものとして位置付けられていることを批判する。オットーは、このシュライアマハーの「弱点」をフリースの哲学に依拠することで克服することができるのだと考えたのである。

第6章では、19世紀半に学問として成立した実験心理学の祖であるヴィルヘルム・ヴントによって、「宗教」がどのように分析されていたかを確認し、それに対するオットーの評価、批判をヴント『民族心理学』へのオットーによる書評を中心に分析する。さらに、オットーのヴントに対する批判は、彼のダーウィニズム批判とパラレルをなしていることを確認した上で、その批判の根本的な点が、時間的なものと永遠的なものとの混同であったことを示す。オットーは、ヴントによる宗教現象の分析に対して批判を加えた上で、「畏怖(Scheu)」という感情が宗教現象に対して持つ独自の意味を指摘する。この「畏怖」に関する分析、叙述は、後の『聖なるもの』においても中心的な役割を果たしていることを確認する。

第7章では、神学者エルンスト・トレルチとの対比において、オットーにおける「宗教的アプリオリ」概念を明らかにする。20世紀初頭にドイツで行われた「宗教的アプリオリ」をめぐる議論の中心となったのが、オットーとトレルチである。トレルチが、心理学的な成果を取り入れつつ、認識論を修正し続けていくことによって得られるものとして「宗教

的アプリオリ」を捉えているのに対し、オットーは、宗教に関する学問的研究が可能となる基礎づけとして「宗教的アプリオリ」を捉えていることを確認する。しかし、重要なのは、オットーは宗教自体を理性によって基礎づけようとしているのではない点である。よって、彼の宗教哲学的議論においては、宗教的経験における対象の圧倒的超越性、一方的、優越的に働きかけてくる性質というものが前提とされていることを明確にする。

第8章においては、心理学者ウィリアム・ジェームズとの対比において、両者において捉えられていた「現象と実在」という問題を見ていく。まず、オットーとジェームズの宗教研究における方法を比較した上で、宗教現象に関する研究が両者にとってどのような意味を持つものであったかを確認する。「現象と実在」という問題を捉えるための方法において、多くの面で両者は共通点を持っていた。しかし、ジェームズが宗教現象を「現象」として探求していくのに対し、オットーは、「神学者」として、この「現象」を基礎づける必要性を感じていた。この課題が、オットーを宗教哲学的仕事における中心的モチーフとなっていることを確認する。

第9章では、神学者カール・バルトとの対比において、神学者と「宗教学者」にとって絶対他者というモメントがどのように現れているかを確認する。オットーが、自由主義神学の伝統に位置付けられるものの、『聖なるもの』において絶対他者的なモメントを示していることが彼の真骨頂とされる一方で、「新正統主義」とも形容されるバルトの神学において「絶対他者」は重要な意味を持つ。両者のシュライアマハーへの異なる批判を起点として、両者の捉えた問題意識、そしてそれへの対処を明らかにする。そして、オットーの学的営みを、彼が感じていた「宗教的世界観」の危機に対して、「近代においてありうる弁証論」として展開されていることを示す。